

# 長崎砂糖考(1)

本会幹事

村崎春樹

## 砂糖の渡来は

日本で砂糖の記録が見られるのは、歴史を遡ること天平勝宝6年(754)に渡来して唐招提寺を開いた唐僧鑑真(がんじん)の荷物の中に、胡椒や石蜜など共に甘蔗(さとうきび)や甘蔗原料とした庶糖がみられる。その当時はまだ砂糖は貴重品であり、永観2年(984)に丹波康頼が書いた『医心方』には「甘蔗・石蜜・紗糖が内臓の働きをよくする薬」として紹介されている。

室町時代になると、『七十一番職人歌合』に「砂糖饅頭(さとうまんぢう)」、『庭訓往来』には「砂糖羊羹」などが見られ饅頭や羊羹の原料として用いられたことから、日宋貿易や日明貿易によって日本へ砂糖が輸入されていた事がわかる。

16世紀の戦国時代末期には澳門(マカオ)からポルトガル船が九州各地に来航、南蛮貿易が始まる。天文19年(1550)に平戸にポルトガル船入港、天文22年(1553)から永禄4年(1561)にかけては年間1隻から5隻のポルトガル船が入港した。これ等によって中国産の砂糖が安定的供給されたが、その量は年間100トン前後であった。慶長14年(1609)にオランダ船、同18年(1613)にはイギリスが入港した。

## 長崎へ輸入された砂糖はどこから

元亀2年(1571)にポルトガル船入港したが寛永16年(1639)には、ポルトガル船の来航が禁止さらにポルトガル人の国外追放と続き、寛永18年(1641)にオランダ商館が平戸から出島へ移りました。また唐船は、寛永12年(1635)に長崎以外への寄港が禁止されました。

オランダ商館が出島へ移った頃、オランダは台湾を占領して砂糖きび栽培と砂糖生産に力を入れます。各地のオランダ商館からバタビア総督府への報告をまとめた『バタビア城日誌』によると

台湾(赤嵌)での砂糖生産状況が、次のように報告されている。

年号	白砂糖(斤)	黒砂糖(斤)	合計(斤)
1634	12,042	110,461	
1641			500,000
1644			361,400
1645			1,500,000

内6万5千斤は日本へ輸出されたと記録されている。

同じ時期の寛永15年(1637)にはバタビアにも、砂糖農園を建設され約10年後には20の製糖所ができて年間20万斤が生産された。オランダ船が持ち込んだのは、これらの台湾やバタビアの砂糖であった。

この他に、『長崎オランダ商館の日記』に1661年に、長崎に唐船33隻が砂糖890,000斤を積んで入港した記録が残されている。この砂糖の内訳は、次の通りであった。

白砂糖 590,540斤

黒砂糖 222,880斤  
氷砂糖 75,410斤

また、同じ『長崎オランダ商館の日記』には1641年にも、唐船が運んできた砂糖の記録がある。

入港日	出港地	白砂糖(斤)	黒砂糖(斤)	氷砂糖
1641年7月5日		19,800		
1641年7月10日	福州	400	16,000	
同7月10日	広東	11,500	1,000	
同7月12日		270,000		
同7月13日	福州	700,000		
同7月14日		139,200	10,300	30,000
同7月22日	福州	4,200		
同7月23日	広南		40,400	
同7月23日	福州	77,050	8,300	
同7月24日	潭州		1,660	
同7月25日		275,700	800	62,300
同7月26日	広東	55,000	1,200	
同7月27日	広東	2,500		
同7月27日	泉州	18,500		
同7月29日	泉州	10,000	18,000	

同じ『長崎オランダ商館の日記』には、オランダ船の記録があり、次のように記録されている。

入港日	船名	積込港	白砂糖(斤)	赤砂糖(斤)
1641年8月1日	コニンギンネ	暹羅(シャム)		55,600
同8月29日	パイス	台湾	42,200	

このように、長崎に輸入される砂糖の産地(積出し港)は、華南沿岸と東南アジア各地であった。

華南各地

泉州  
福州  
寧波  
南京

東南アジア

東寧(台湾)  
廣南(ベトナム南部)  
安南(ベトナム)  
占城(ベトナム中部沿岸)  
東京(ベトナム北部)  
交趾(ハノイ)  
東浦寨(カンボジア)  
暹羅(タイ)  
バタビア



サトウキビ畑

(次号へつづく)